

		[8]
氏 名	鈴  嶋  梓	<small>すず しま あずさ</small>
博士の専攻分野の名称	博士(文学)	
学 位 記 番 号	文博第 231 号	
学 位 授 与 の 日 付	平成 27 年 3 月 31 日	
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当	
学 位 論 文 題 目	シェイクスピア喜劇作品における音楽の意味	
論 文 審 査 委 員	主 査 教 授 坂 本 武	
	副 査 教 授 干 井 洋 一	
	副 査 教 授 高 橋 美 帆	

## 論文内容の要旨

鈴嶋 梓さんの論文「シェイクスピア喜劇作品における音楽の意味」は、タイトルに示すように音楽を中心にシェイクスピア喜劇の 5 作品を論じたものである。目次は以下のようになっている。

### 序章

第一章 音楽の歴史とシェイクスピア

第二章 『恋の骨折り損』における音楽——回復の象徴としての音楽

第三章 『から騒ぎ』における音楽効果——「気付く」と音楽の関係

第四章 『十二夜』における音楽の効用性——癒しや慰めの効果を及ぼす音楽

第五章 『冬物語』における音楽の特徴——オートリカスの歌と回復の意味を示す音楽

第六章 『テンペスト』における音楽の意味——魔法としての音楽

### 結論

その他、「付録」として実際の楽譜が例示されている。『から騒ぎ』から 4 曲、『十二夜』から 4 曲、『冬物語』から 2 曲、『テンペスト』からの 2 曲である。これらのわずかな楽譜によって鈴嶋さんの音楽論が現実的な裏付けを得ていると言える。

序章では先行研究の一つ、山浦拓造『シェイクスピア音楽論 序説』を引いて、シェイクスピア劇における音楽の重要性を端的に示す『ヴェニスの商人』の一場面（5 幕 1 場）に注目する。ロレンゾの台詞にこうある。「かつて詩人は歌った、オルフェウスが木や石や水の流れを動かしたと。木石のようなかたくなさも洪水のような凶暴さも、音楽を聞けばその間だけ性質を変えるのだ。心のうちに音楽をもたないもの、美しい調べにも心を動かされないもの、そういう人間はただ謀反、陰謀、破壊にのみ向いている。その精神は暗闇のように頑迷であり、その感情は地獄に接するエレボスのように暗黒だ。そういう人間はけっして信用してはいけない。」音楽と人間の心の関係をこのように捉えるところに本研究の議論の出発点がある。

第一章では古代ギリシャの哲学者ピタゴラス、アレクサンドリア派のキリスト教神学者

クレメンス、『哲学の慰め』で知られる 5 世紀のローマの神学者ボエティウスなどの音楽観が辿られる。しかしコペルニクス（1473－1543）の地動説によって「天上の音楽」の概念が揺らぐなど、新旧のキリスト教革命も相俟ってシェイクスピアの時代は、社会的な不安や精神的な混乱がもたらされていたことが指摘される。こうした背景の中で、宗教音楽においてはオルガンが作られ、その他リュート、ヴァージナル、ヴィオラ・ダ・ガンバ、シタールなどの楽器類が当時よく使用されたことを説明している。また当時の代表的作曲家たち（トマス・レイヴンズクロフト、トマス・モーリー、ウィリアム・バード、ジョン・ダウランド、ロバート・ジョンソン、ジョン・ウイルソン、ウィリアム・コーニッシュなど）についての概説が見られる。宗教音楽以外でも、世俗的音楽ではマドリガルや中世以来のバラッドが流行していたことが指摘される。総じてルネサンス期は諸芸術の隆盛の時代として認識されているが、音楽の領域もまたシェイクスピアの劇芸術に重要な効果をもたらすものであることを主張する。

まず、シェイクスピアの作品における音楽の役割について、1) 王侯貴族の入退場の際のトランペットのような効果音、2) 登場人物の台詞への音楽理論、流行音楽の影響が表れる場合、3) 舞踏会での演奏の実際的な効用、および微妙に揺れ動く登場人物の恋心の表現、4) 『テンペスト』に見られるような魔術の力と呼応する音楽の例というように四つに分けて議論の明確化を図っている。

『恋の骨折り損』を論じる第二章では、秩序の回復を象徴する音楽の働きに焦点を当てる。この劇では、ナヴァール王率いる男性陣とフランス女王に使える女性陣の喜劇的対立が描かれる。3 人の貴族が、ナヴァール王とともに学問に没頭するために「女性と会わない、勉強しろ、断食しろ、眠るな」という王の非現実的な命令を守ろうとするが、女性たちの魅力に次第に懐柔されて男たちの誓いがなし崩しにおわるという滑稽話である。その最後に春と冬の情景を歌う“The Song”が導入されて、この素朴で他愛ない唄によって男たちが無視した「時間」の概念と、男女の間の本来あるべき「言葉」によるコミュニケーションの秩序が回復することが示されるという。

『から騒ぎ』を扱う第三章では、ことに“note”という言葉が「楽器の音、調子、音符」などの音楽用語として用いられるのと同時に「気付くこと、知ること、認識すること」という意味で使用されていることに着目し、その過程において音楽が登場人物の気持ちを浮き彫りにし、重要場面に効果を与えることを明らかにする。また登場人物の台詞の中に当時流行したバラッド——“Heigh·ho for a husband”, “Sigh no more Ladies”, “The God of Love”, “Light o’ love” など——が巧妙に組み込まれ、当該人物の微妙な心情を伝えるのに成功しているという。

第四章『十二夜』の音楽の効果を説く章でも、当時のはやり歌やバラッドが利用され、主筋においては「登場人物の心情」に働きかける効果を持ち、「癒し」や「慰め」を与える曲が多用され、副筋においては音楽が喜劇的効果を生み出し、「ロマンスの世界と現実の世界のギャップ」を観客に楽しませるといふ。ことに主筋と副筋の境界を自由に行き来する道化フェステの最後の歌は、「ロマンスの世界と現実の世界を結びつける」役割を担い、劇世界に「統一感」を持たせるといふ。

第五章で論じる『冬物語』では、劇の後半部の 4 幕以降に音楽が集中する。シチリア王リオンティーズは、自らの愚かな嫉妬心と妄想により最愛の妻を失い、周囲の人間関係も

崩壊させる。16年の歳月が流れ、劇は一転して悲劇的調子から喜劇のそれへと変化する。それを齎すのが一連のオートリカスの歌である。その歌は、当時の庶民の生活を写し、同時に登場人物の性格描写にもなっている。羊毛刈り祭りの場面では、音楽と舞踏が大掛かりに用いられる。最後にリオンティーズの妻ハーマイオニの銅像が動き出す場面にも音楽が集約的に導入される。それによりハーマイオニの再生と劇世界の調和が達成されると説く。

第六章の『テンペスト』論文では、プロスペローの魔術の中で音楽が生かされることを明らかにする。主な音楽は、エアリエルの歌4か所、キャリバンの歌、劇中劇のジュノーとシーリーズの歌である。ことに有名なエアリエルの、“Full fathom five thy father lies”はファードィナンドの嘆きを鎮め、慰める効果をもたらす。またゴンザーロの身に迫る死の危険をエアリエルが歌で知らせる。小太鼓と笛で演奏するエアリエルの歌を聞いた異形の者のキャリバンは、「この島はいつも物音や歌声や音楽がいっぱいだが、楽しいだけで悪いことはなにもしない。時々、耳元でブーンと響くことがあるかと思うと、歌声が聞こえてきて、ぐっすり眠ったあとでもまた眠くなることがある」（3幕2場）とプロスペローが支配するこの魔法の島の音楽の性格を象徴的に語る。そして宿敵ナポリ王アロンゾ一行を迎える音楽は、彼らには不可思議な「天上の音楽」‘heavenly music’であり、一行は「狂気」を癒され、正気に戻される。プロスペローが宿敵ナポリ王への復讐をやめ、元のミラノ大公の姿に戻る最後の場面でエアリエルの歌“Where the bee sucks, there suck I”（5幕1場）が導入される。この歌は舞踊のリズムを伴った楽しい曲調であり、作曲者はロバート・ジョンソンであることが巻末の資料で明らかにされる。この歌を最後にエアリエルはプロスペローの魔法を解かれ、自由の身となり、劇世界のすべての秩序もここに回復する。

結論としてすべての作品においてピタゴラスの「天上の音楽」の概念が含まれているという。「秩序の崩壊した世界にいる人間が本来あるべき姿に戻る」過程において音楽が重要な役割を果たすというのである。

## 論文審査結果の要旨

鈴 嶋 梓さんの研究は、シェイクスピア劇における音楽のイメージを喜劇作品5作に限って論じたもので、シェイクスピアの悲劇・喜劇・歴史劇・ロマンス劇に及ぶ音楽的要素のすべてを論じたものではない。その意味では彼女の研究は、このテーマへの序論というべきであろう。

そもそも「音楽」を「言葉」によって論ずるということは、それ自体が矛盾を含む困難な課題である。音を説明するのにどんなに言を費やしてもついにその音が響いてくることはないであろうからである。それが可能となる事態を想像すれば、それは論者自身が音楽の演奏家であったり、あるいはクラシックの専門的批評家であったりするというような幸運に恵まれ、同時に文学研究の専門家でもあるような特別な才能に恵まれている場合であろう。文学を研究する者にとってはそれほどに困難な課題に見える。

鈴嶋さんは、そのような乗り越えがたい課題に果敢に挑戦しているのであり、シェイクスピアの時代の音楽を取り巻く基本的事情はこの研究によって明らかにすることができた

とすることができる。論証の仕方や資料の扱い方などまだ議論の余地があるとはいえ、今後の研究の進展の可能性を多く孕んでいることは疑いない。

よって、本論文は博士論文として価値あるものと認める。